

『文選』「登樓賦一首」の内容を踏まえる。

⑭ 一三四句「鏡照嘆華顛」一三五句「旅思排雲雁」一三六句「寒吟抱樸蟬」に投影されている古典籍

道真が太宰の謫居で初めて味わった梅雨・酷暑に悩まされながら、どれほど涼気の漂う秋の到来を心待ちにしたか、想像に難くない。その一方で、秋は万物の凋落を象徴する時候でもある。それは『楚辭』を始めとして古くから中国の文人たちが、多く詠んできたことでもある。

筆者は、道真のこの一三六句の「寒吟抱樸蟬」に『文選』所収の潘安仁の「秋興賦并序」中の「蟬嘒嘒而寒吟兮」の句の投影があることを既に言及したが、改めて、この「秋興賦」全文を吟味してみると、道真がこの賦の主題・詩情を強く意識し、投影させたものとなっていることに気付く。

⑮ 一七八句目「溝壑恐先填」の「溝壑」について

『春秋左氏傳』「昭公十三年」の一文。

『孟子』「滕文公下」の一文。

また一七八句目「溝壑」および五十四句目「迍邐」の二語の用例として、『文選』に左思の「詠史詩八首」の七首目に、「憂在填溝壑／英雄有迍邐（憂ひは溝壑に、填るに在りしなり／英雄も迍邐する有り）」の句が見え、この道真の詩への投影が窺える。

⑯ 一七九句目「潘岳非忘宅」の「宅」について

この一句は『文選』卷第十六「志下」「閑居賦一首」、賢臣であったが時運を得なかった潘岳の「賦」を踏まえて